Title	『楚囚之詩』の前提 : 詩語獲得の現場瞥見
Author(s)	黒木, 章
Citation	聖学院大学論叢, 11(3): 287-304
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=584
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『楚囚之詩』の前提

――詩語獲得の現場瞥見――

黒木　章

はじめに

『楚囚之詩』（明22・4）は、透谷文学の誕生を告げるものである。しかし、その世界は誠に混沌としている。

この混沌について表面的な事実を挙げれば、例えば次のようなことがある。即ち、明治22年4月6日の日付のあるこの詩の「自序」には、冒頭に「余は遂に一詩を作りあげました」とあり、中程に「余は此『楚囚の詩』が江湖に容れられる事を要しませぬ然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して素志を貫ぬく心になれば遂には狹隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小説の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに難からずと」、さらに末尾に「元より是は吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此様にして余の詩を作り始めませふ」と書かれている。新体詩運動の中での彼の詩の達成がかなりの高揚した感情を伴って宣言されているといえる。しかし、周知のように、この詩は作者によって排棄されたものでもある。4月12日の「日記」に「去る九日に印刷成りたるが又熟考するに餘りに大膽に過ぎたるを慚愧したれば、急ぎ書肆に走りて中止することを頼み直ちに印刷せしものを切りほぐしたり。自分の參考にも成れと一冊を左に綴込み置く」とあるのがその事情を語る。

作者が排棄し公刊を拒んだこの詩を以て「透谷文学の誕生を告げるもの」「透谷の詩の達成」を言うのは如何かとの意見はあろう。その点では、彼が公刊を拒否したにも拘らず、数冊は書店の店頭に出ており実際に買った人もあるのだから、確かにこの詩は存在しなかったと見做すわけにはいかない。いや、問題の本質はそういうことではなく、この詩の混沌、換言すれば透谷の言語表現にあるはずである。

『楚囚之詩』の混沌は、いわば言語の暗渠のようなものである。それは、窺き込む者をして越境せしめるべく不思議に誘惑する。それのみか、窺き込む者の言語の根底を衝いて、人にとって言語表現・言語行為とは何かというような問題に直面させる体のものである。

「自序」をみるだけでも多くの問題にぶつかる。例えば、透谷は

「余は此『楚囚の詩』が江湖に容れられる事を要しませぬ然し、余は確かに信ず」云々と述べて「是は吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ」と言って（この物言いは『新體詩抄』以来繰り返されてきた常套的謙遜表現に倣うものとみてもよいのだが）、この詩が「寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此様にして余の詩を作り始めませふ」と意気込む。だが、彼は「吾國語の所謂歌でも詩でも」ないつまり和歌でも漢詩でもない「余の詩」がどのような詩としての内実を持つと考えるのだろうか。或いは、この詩がどのように「小説」と連続しまた断絶していると考えるのだろうか。

「小説」といえば、直ちに明治20年8月18日の「石坂ミナ宛書簡草稿」が想起される。そこには、明治18年に「失望落膽」から回復した透谷が「爰に小説家たらんとの望を起しけり（中略）希くは佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配せん」と志したこと、「然れども未だ美術家たらんとは企てざりし」ということが書かれていた。「小説家」を志したという明治18年から約三年半後の今、彼は「是は吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です」と言う。つまり「希くは佛のヒューブ其人の如く」政治小説家たらんとした彼が、明治20年8月にはそれまでとは異なる「美術家」を意識したことが読み取れる書き方をし、そして今、「自序」でこのような言い方をしているのである。この間に彼は如何なる内部経験または文学上の経験をしたのだろうか。或いはこの詩に即して問題を挙げれば、この詩の語り手は何故一人称なのか、また何故「曾つて誤つて法を破り／政治の罪人として捕ハれたり」という形で語り始めなければならないのか。さらに問題にすれば、既に述べたように「余は遂に一詩を作りあげました」「余は此『楚囚の詩』が江湖に容れられる事を要しませぬ」「左れど、是れでも詩です、余は此様にして余の詩を作り始めませふ」と自信のあったはずのこの詩のどこがどのように、彼をして「餘りに大膽に過ぎたるを慚愧」せしめ、結果として排棄せしめたのか――というように問題は循環してくるのである。

前置きが長くなったが、このような問題を解明するには『楚囚之詩』にみられる透谷の詩語のエロス的滲出とその飛騰とを考えてみなければならない。そのために、方法としては可能な限り透谷自身が残した資料に即して彼の発語の基盤・表現の現場に分け入る必要があるだろう。わたくしの狙いもそこにあるが、これはその前提的考察である。また、ここではバイロンの Prisoner of Chillon との関係に立ち入れないことも予め断っておきたい。

※

先に言及した明治20年8月18日の「石坂ミナ宛書簡草稿」は、透谷の幼少年期の生活環境と彼の感性に触れていて、貴重な資料である。

透谷は四才のとき、生後間もない弟垣穂を連れて上京した両親に「自分は捨てられたのではないか」と不安を感じていたとされる。[1] 小

田原の祖父母に預けられ、その後の幼年期について、この書簡草稿では「歴史小説を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕して寢ても起きても其事ばかり思ひ續けていつも己れの一身を是等の英雄の地位に置かん事を望み居けり、且つ又た生は既に考へ深き小兒となりたれば諸兒の如く笑ひ興じて愉快に光陰を送ると云ふ事出來ず（中略）父母祖父母皆、愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ生を親愛する者一人もなく」と書いている（この書簡草稿は、美那に別れを告げようとして書き始められたのだが、実は抑封せんとして抑封し切れない美那恋慕の感情を表現するものになっている）。ここに引用した部分の前半は、例えば明治17年後半か18年に書いたとみられる「哀願書」の「單へニ三千五百萬ノ同胞及ビ連聯皇統ノ安危ヲ以テ一身ノ任トナシ且ツヤ又タ世界ノ大道ヲ看破スルニ弱肉强食ノ狀ヲ憂ヒテ此弊根ヲ掃除スルヲ以テ男子ノ事業ト定メタリ」という彼の「アンビション」に直結していくものであろうし、「且つ又た生は既に」以下の後半部分は例えば「三日幻境」（明25・8と9）の「交りを當年の健兒に結びて鬱勃沈憂のあまり月を弄し花を折り、遂には書を抛げ筆を投じて、一二の同盟と共に世塵を避けて一切物外の人とならんと企てき（中略）おもむろに庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、劔を撫し時事を慨ふるものは蒼海、天を仰ぎ流星を數ふるものは我れ、この三個一室に同臥同起して玉兎幾度か罅け幾度か滿ちし」というように、極く親しい民権運動家の交わりの中にあっても他と微妙に違う己れの在りようを意識して自他を見る透谷の眼に繋っているように思われる。

彼の幼少年期を糸口にして、彼の感性や性格の一端に触れてみたのは前提的手続きとしたいためだが、このようなことを確認しながら、彼の民権運動から離脱するときのようす、次に民権運動から離脱した後に「佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配せん」としてぶつかったいくつかの問題、さらに石坂美那との恋愛において経験することになる彼の激烈な転回とを検討してみたい。

※

民権運動からの離脱をめぐる問題を検討してみる。

先の引用部分に続いて、「哀願書」では次のように書いている。即ち、「然ルニ世運遂ニ傾頽シ惜ヒ乎人心未ダ以テ吾生ノ志業ヲ成スニ當ラザルヲ感スル矣」と。或いは例えば、大阪事件の大矢正夫らが決行した強盗計画に加担することを断って三多摩地域から遠ざかろうとする己れの心情について、「富士山遊びの記臆」（明18・夏）では次のように書いている。即ち、「左れど懶惰物のくせとてハ、日本人の諸共に、保守黨主義に立籠り、改良するも甲斐なき事と、朝寢ハ御座れ、書臥も善し、身を守る道といふ字に、背かねバなまけて國を滅すも、知らぬと云ふて、立通す愚かの上の上塗りと、笑ふのみかわ、笑へバ笑へ志士どもが杖にすがりて進み行く飢餓に其身も瘦せ果て、（中略）柔しき心の志士どもが今やつのらば殘忍なる血の雨降らす不幸にも出合わぬ者にもあらぬかし」と。この二つの引用部分から次のこと

が言えるのではないか。即ち、福島事件や加波山事件、秩父事件などにおける官憲の弾圧、その過程で露呈した自由党の変質と分裂、暗転する政情と不景気の中で虚無的自棄的になる庶民、そのような流れに抗して「世運」から浮き上がり一層過激になる民権左派の英雄的暴挙、大阪事件に絞っていえば「非常手段」と称して強盗を決行する「同盟」たちの「血の雨降らす不幸」――透谷はこれらのことを見据えているのだと。ただ、「富士山遊びの記臆」と「三日幻境」を重ねていけば、大矢が誘った強盗計画への加担を断ったときの透谷は「髪を剃り」、「盟ひの友にも言ひ兼ぬる」己れの思いを「少しも曲らぬ杉の杖」に托す道士の姿をしていたことが注意される。

強盗計画への加担を断るときの状況をもう少し細かく見てみよう。

大矢は、明治18年6月20日に磯山清兵衛に呼ばれて初めて計画を知らされる。[2] 三日三晩煩悶した後、これに従う旨の返事をする。座間地方でようすを探り計画を練っているときに、山本与七の情報をもとに「恩師にて、又救世主なる」叔父大矢弥市方を襲うように指示される。このときも「一身を捨て、國家に貢献するのみ」と強盗決行の意志を変えない。民権運動家たちを集めていた神田静修館で大矢が透谷と同宿となったのは明治17年1月のことで、大矢は透谷が尊敬し兄と慕う「義友」となった。大矢が強盗計画への参加を誘ったのは大矢弥市方を襲う前のことであろう。透谷は驚く。数日間の猶予をもらい、返事は八王子川口村の秋山国三郎方ですることを大矢に伝えたと思われる。透谷の「三日幻境」がそのことを語ってくれる。即ち、「三たび我が行きし時に蒼海は幾多の少年壮士を率ひて朝鮮の擧に與らんとし、老畸人も亦た各國の點取に雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を廢して自村の興廢に關わるべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて我は既に政界の醜狀を悪くむの念漸く專らにして利劔を把って義友と事を共にするの志よりも静かに白雲を趁ふて千峯万峯を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に餘りしかども私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行われは髪を剃り笻を曳きて古人の跡を蹈み、自ら意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に與らざりしも、我が懐疑の所見朋友を失ひしによりて大に増進しこの後幾多の苦獄を經歴したるは又た是非もなし」と。

大矢は、その後も座間で計画を練る。8月に大矢弥市方、9月に愛甲郡々役所などを襲うが、いずれも失敗。10月21日に高座郡座間入谷村戸長役場の一〇七一円八〇銭を奪う。一方の透谷は、9月に東京専門学校に再入学し、専修英語科に籍を置く。先に触れたように「希くは佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配せん」と望んでのことであった。

透谷が民権運動から離脱したのは、虚無化の度を深める庶民から浮き上がってしまった民権運動家たちの「非常手段」と称して強盗に走る感覚と彼の倫理感覚とがズレていたためでもあろうが、彼がそれら壮士たちの実態を熟知していたことも大きな理由だったと思われる。

例えば、大矢らが強盗までして集めた「軍資金」はどのように使わ

れたか。その殆んどは「酒上の議論、春樓の豪放」[3]に費され、或いは持ち逃げされたのである。このことについて福田英子が次のように書いている。[4]即ち、彼女は、女性であるゆえに官憲の監視も緩むだろうと期待されて、秘密製造された爆弾の運び役であったが（或る時、横浜共立女学校の寄宿生であった石坂美那の部屋に爆弾を隠して難を免れたこともあるという）、渡韓前に集合した壮士たちの大阪でのようすを「一日磯山より葉石の來阪を報じ來り急ぎ其旅寓に來れよとの事に、何事かと訝りつゝも行きて見れば、同士等今や酒宴の半ばにて、酌に侍せる妓のいと艶めかしうそうどき立ちたり（中略）磯山氏よりの急使を受けて、定めて重要事件の打ち合せなるべしと思ひ測れるには似もやらず、痴呆の振舞、目にするだに汚はし、アゝ日頃頼みをかけし人々さへ斯の如し、他の血氣の壯士等が、遊廓通ひの外に餘念なきこそ道理なれ、左りとては歎はしきの極みなるかな（中略）扨ても世には卑怯の男もあるものかな、彼はそのまゝ奔竄して、遂に行衛を晦ましたり。彼が持逃げせる金の内には大功は細瑾を顧りみずてふ豪語を楯となせる神奈川縣の志士が、郡役所の徴税を掠めんとして失敗し、更に財産家に押入りて大義のために其良心を欺き、強ひて工面せる金も混りしぞや。然るに彼は此の志士が血の涙の金を私費して淫樂に耽り、公道正義を無視して、一遊妓の甘心を買ふ、何たる烏滸の白徒ぞ」と書いている。透谷も嘗て八王子の遊廓に出入りした「白徒」の一人であった。そのことで大矢に叱責されたこともあるといわれている。[5]透谷は「大功は細瑾を顧りみず」と強盗を決行する壮士たちの実態を知っていた。透谷は後に「曾つて余ハ政治の暴戻を憤り人民の卑劣なるを憂ひ、有志者の酒上の議論、春樓の豪放を聞くに忍びず見るに耐へず、悵然として自ら恥ぢ、慨然として自ら悔ひ（中略）彼等壯士の輩何をか成さんとする、余ハ既に彼等の放縦にして共に計るに足らざるを知り恍然として自ら其群を逃れたり」と書いている[6]（透谷がこれを書いている時には既に大阪事件の裁判も終り、また美那との恋愛も成就している。しかし、これは大阪事件への関与を疑われて追捕を免れるために既に米国オークランドに逃げていた美那の弟公歴が非合法反政府の新聞「新日本」を透谷にも送り届けてきたことへの批判的な気持ちを抱え、また就中神奈川県会の暴力事件に絡んで投獄された美那の父昌孝の「睾丸事件」のために心を痛めている美那を慰めるために書かれたのであるから、過度の壮士批判、「英雄の末路」観がみられて注意する必要はある）。ここには透谷が見ていた民権運動家たちの実態と「富士山遊びの記臆」で予見していた「心柔しき志士ども」の「血の雨降らす不幸」への見切りが具体的に書かれている。このような「放縦にして共に計るに足らざる」壮士たちの実態が彼を民権運動から離脱させることになったのも事実ではなかろうか。

とはいえ、民権運動からの離脱が、透谷に深刻な負い目の意識を抱かせ、彼を「苦獄」に追い込んだことも事実であろう。その後彼は「苦獄」について繰り返し書くことになる。しかし、強盗計画への加担を断るときの透谷が「髪を剃り笄を曳」く姿で大矢の前に現われるのは大仰ではある。大矢が透谷を責めずに許したことは一層彼の負い

目意識を強くしたというのもわかり易い。透谷は「苦獄」「苦戰」「一種の牢獄」という言葉を使いながら「三日幻境」で次のように書いている。即ち、「この第三回の行われは髪を剃り節を曳きて古人の跡を蹈み、自ら意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄に與らざりしも、我が懐疑の所見朋友を失ひしによりて大に増進しこの後幾多の苦獄を經歴したるは又た是非もなし（中略）階を登れば老俠客莞爾として我を迎へ相見て未だ一語を交はさゞるに滿堂一種の清氣盈てり。相見ざる事七年相見る時に驟かに口を開き難し（中略）漸く談じ漸く語りて、我は別後の苦戰を説き起しぬ。この過去七年我が爲には一種の牢獄にてありしなり。我は友を持つ事多からざりしに、その友は國事の罪をもつて我を離れ、我も亦た孤煢爲すところを失ひて浮世の迷巷に蹈み迷ひけり（中略）天地の間に生れたるこの身を訝りて自殺を企てし事も幾回なりしか、是等の事今や我が日頃無口の唇頭を洩れて、この老知已に對する懺悔となり」云々と。透谷がここで秋山国三郎に語る「懺悔」が民権運動から離脱した己れのその後の負い目意識に関わるものであったことは容易に想像できる。透谷が大矢の強盗計画への加担を断るとき、秋山はその現場に居合わせたか少くともこのことを知っていたらしいことも推測される（この秋山宅訪問は、帝国憲法発布に伴う恩赦によって大井憲太郎や福田英子などが明治22年2月12日には出獄しているのに、大矢は明治24年12月15日に特赦によって徳島監獄をやっと出獄した。透谷が七年ぶりに秋山を訪ねたのは、出獄した大矢にそこで再会するためであったことはこのような理解を一層助ける）。

繰り返しになるが、民権運動から離脱する透谷には「懶惰物のくせとてハ、日本人の諸共に、保守黨主義に立籠り、改良するも甲斐なき事と、朝寢ハ御座れ、晝臥も善し、身を守る道といふ字に、背かねバなまけて國を滅ぼすも、知らぬと云ふ」庶民の虚無的な姿と「笑へバ笑へ志士どもが杖にすがりて進み行く飢餓に其身も瘦せ果て、（中略）柔しき心の志士どもが今やつのらば殘忍なる血の雨降らす不幸にも出合わぬ者にもあらぬかし」という結果とが予知されていた。

しかし、「髪を剃り節を曳」く姿で大矢に強盗計画への加担を断ること、大矢が責めることをせずそれを認めたこととが一層の負い目意識となって彼を苦しめたということは、そのときの透谷が大矢の政治運動を凌駕する彼自身の運動論を提示できなかったということであり、だからこそ彼は異様な道士の姿で大矢に向き合っているのだというべきである。勿論、その負い目意識が彼にとって深刻なものであったろうことは理解しても、それは未だ大矢の選ぶ「非常手段」を凌駕する政治運動の理論或いは思想の提示ではありえず、倫理的な感覚次元での反応だといわなければならない。

しかし、彼がその負い目の意識を抱えて「遂に脳病の爲めに大いに困難し」「一種の牢獄」と捉えてそれに拘泥したことは注意しなければならない。なぜなら、その自己の内部に垂鉛をおろし「アンビション」の実質を剔抉する痛みに満ちたその「苦戰」が、透谷の言語を紡ぐための戦いであり或いは感覚の問題を思想化する戦いであったと考

えられるからである。

※

後に書かれた「我牢獄」（明25・6）は奇妙な小説である。勿論、これは透谷独自の表現が成立した後の作品だから短絡的に論じることはできないが、ここにも民権運動から離脱した後の「苦獄」の状況が抽象化された形で書かれる。この問題に関わる部分のみを抜き出してみよう。即ち、「然るに怪しくも我は天地を數尺の廣さとして己れが坐するところを牢獄と認む、然り牢獄なり、人間の形せる獄吏は來らずとも折々に見舞ひ來るもの是れ一種の獄吏に外ならず、名譽是なり權勢是なり富貴是なり榮達是なり」と。言葉がここまで結晶するのは、（例えば後に触れる石坂美那との恋愛においてもそうであるが）彼が民権運動からの離脱によって抱えることになった負い目の意識に拘泥し、己れの「アンビション」の内実を剔抉する痛切な経験を言葉に発酵させたからだと考えられる。

ところで、民権運動から離脱してこのような深刻な負い目意識を抱える透谷が、「佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配」するような政治小説を書くことは不可能なことと言わざるをえない。少くともそのころの通念であった政治的な貴種・才子佳人の物語を構想するには、透谷の心情と結果として想定される物語世界との間に落差がありすぎるからである。東京専門学校に再入学して「佛のヒューブ其人」のような政治小説家を志したとき、透谷が気付かなければならなかったのは、実はこの落差なのだが、彼はそのことに気付いていない。

しかし、東京専門学校に再入学して「同功會」に所属し、その機関誌『中央學術雑誌』を購読した透谷は、ここで文学革新期の重要な諸論に触れる。そのことが彼の再入学のときに志向していた政治小説についての考え方を変化させたのではないかと思われる。明治20年8月18日の「石坂ミナ宛書簡草稿」で、明治18年の「失望落膽」から回復した彼が「從來の妄想の非なるを悟り爰に小説家たらんとの望を起しけり」と書きながら続いて「然れども未だ美術家たらんとは企てざりし」と敢えて書いているのはこのことを示しているだろう。透谷が読んだ当時の『中央學術雑誌』では、例えば坪内逍遙が「小説神髄拾遺」（明18・5）「文章新論」（明19・5と7）「美術論」（明20・1）などを載せて文学の芸術的価値を高めるための方法を具体的に論じ、高田半峰が「當世書生氣質の批評」（明19・1）「佳人之奇遇批評」（明19・3と4）を載せ、さらに二葉亭四迷は「小説総論」（明19・4）「カートコフ氏美術俗解」（明19・5と6）を載せ、嶋田三郎は「小説談」（明20・5）を載せていた。特に逍遙は二葉亭との出会いによって、不徹底であった『小説神髄』の写実論を深めると共に政治小説が「主持ち」の文学になることを批判していたのである。

また、『國民之友』では徳富蘇峰が「近來流行の政治小説を評す」（明20・7）で「政治小説と雖も、既に小説と名乗るからには、小説

らしき躰裁を備へさる可らす（中略）政治小説なるものは（中略）著者が自から其の意見を吐かす、小説を經て、其の意見を吐くものなり然るに現今の所謂る政治小説なる者は、乍ちにして一人の男兒出て來り、雄辨滔々として數千言の演説をなせは、又乍にして一人の婦人出て來り、又雄辨滔々として數千言の演説をなす、彼等は行爲を以て演説せす、直に演説を以て演説せり（中略）現今の政治小説世界の人物は、俗物共進會に適當なる出品なりと評するの外はあらさるなり」と批判していた。

透谷は、これらの諸論を読んだと思われる。例えば、後の明治21年3月23日の「石坂昌孝宛書簡」には「我こそハ著述家なりと、きまりきった理屈の古物博覧會、一篇を演説で埋め立て、政治小説だとか何だとか自分ひとりで天狗様雪中梅とか佳人之奇遇とか、御大層な表題と評したてまつらんのみ」と書いている。このような言説は（勿論、限定するのは危険だが）蘇峰の論調と響き合うところがある。因みに言っておくと、透谷は『國民之友』の社説を丁寧に読み、蘇峰に学ぶことが多かった。いま問題にしている時期――美那との恋愛が問題になる前――からは少し後のことだが、例えば蘇峰の「インスピレーション」（明21・5）や「新日本の詩人」（明21・8）などは透谷の思考の骨格に這り込んでいるといえる。

「從來の妄想の非なるを悟り」とはいえ、民権運動からの離脱によって負い目意識を抱える透谷に当時の政治小説の通念である政治的な貴種・才子佳人の恋愛や大願成就の物語を人情本の手法によって構想することが不可能であっただろうことは先に述べた。にも拘らず彼が政治小説を志向するのであれば、それは勿論幼年期に熱中した『漢楚軍談』や『三国史』などにみられる「英雄豪傑」、『雪中梅』『佳人之奇遇』にみられる政治的な貴種、或いは自棄的虚無の感を増す庶民と「世運」から浮き上がって「非常手段」を敢行する壮士たちの選良意識を描くことではないはずである。それは、例えば大矢正夫らの運動論を凌駕するもの、そして彼自身をその負い目意識から解放するものでなければならない。このような模索の中で「主持ち」の文学を否定して「人情の奥を穿つ」ことを主張する逍遙の論や俗物の演説を否定して「心に思ふて口に出す能はさるものを穿つ」ことを主張する蘇峰の論は、透谷の政治小説志向に一つの方向性を与えたのではないか。それは透谷自身の「一種の牢獄」を政治小説の主題として描くことであり、それは明治20年8月までには絞られてきているのではないかと考えられる。問題は、それをどう描くかである。

透谷の模索は徐々に実質を備えてきていると考えられるが、このような透谷の模索の横に例えば二葉亭四迷の営みを置いて考えてみるのも無駄ではあるまい。なぜなら、『浮雲　第一編』（明20・6）で開化期の人間模様を外側から諷刺的に描いた二葉亭が、続いて『第二編』（明21・2）と『第三編』（明22・7と8）を構想して、免職後の文三がお政には勿論お勢にもつき離されて自分が無価値な存在であることを知らされ、遂には園田家の余計者となって自から二階の部屋で暗い天井を見詰めざるをえない自閉症的人物を描くのに、『第一編』の作

者の位置を変化させて文三に寄添い、文三の心話を作者自身のそれとしていわば一人称的な独白の形で書くようになる、そして物語自体の破綻を招くという事態がある。このような二葉亭の営みは、透谷の模索の時期に重なっているのであり、透谷が政治小説によって講想する主題と方法を具現する際の困難さを思わせるのである。

※

透谷が描くべき政治小説の主題と方法に絡んで河有野史著『三春落花獄裏夢』（明20・4　イーグル書房刊　以下『獄裏夢』と略記する）を問題にしてみよう。

『獄裏夢』については、既に平岡敏夫氏が紹介して『楚囚之詩』との連関を論じたことがある。(7) 平岡氏は、岸田湘煙の「獄ノ奇談」とも連関させて次のように述べた。即ち、

冒頭では主人公烏有子の述懐として「吾過テリ」とくり返されているが、『楚囚之詩』の「曾つて誤つて法を破り」が前掲『雪中梅』のそれとともに想起されよう（中略）この小説の本旨は（中略）加波山事件、飯田事件、静岡事件等をあげ、とくに「大坂ノ獄ソノ徒極メテ蕃シ」として大阪事件を批判している。「之ガ魁首タル者安ンゾ自カラ省ミテ愧ヂザルヲ得ンヤ」として（中略）「甚シキ者ハ人ノ身ヲ劫ヤカシ人ノ財ヲ奪ヒ殘賊戕害爲ザル所ナシ之レガ先輩タル者亦タ由テ以テ自カラ安ンジ自カラ負ム」（中略）牢獄という設定は自省自戒と自由党左派（ママ）（とくに大阪事件）（ママ）批判に現実性を付与するためであったろう（中略）『獄裏ノ夢』が直接『楚囚之詩』に影響を与えているかどうかは明らかでないが、この政治小説が獄中の国事犯の述懐を描き、その首領の「吾過テリ」からはじめて国会開設による自由の期待でおわるところはまず他に類を見ない点である。（中略）大阪事件言及はもし透谷が読んだとしたら首肯できるものだったはず

と論じている。

わたくしは、『獄裏夢』の刊行直後に透谷がそれを読んだと考える。しかもこの小説は己れの小説を構想せんとする透谷に強い刺激を与えた、しかし、物語の主題や手法には違和感を持ったのではないかと考える。そのように考える幾つかの理由を挙げてみよう。

透谷は加波山事件とそれを遡る福島事件には強い関心を寄せていたと推測される。『獄裏夢』の中心人物烏有子のモデルは、福島事件の指導者・磐州河野広中である。河野が福島県三春の出身であることを知らなくても読者にはそうであることが容易にわかるように仕組んである。(8)『河野磐州傳』（大12・12　河野磐州傳刊行會）で見ることができるように、服役中の河野が既に抱いている「吾過テリ」という考え方や老いた母親からの獄中の河野宛の手紙を踏えて、『獄裏夢』の烏有子の述懐がなされていることなどもその例である（『獄裏夢』の刊行時には磐州は未だ服役中である。河有野史なる著者が磐州の別名でないのであれば、磐州の母と子への思いや「吾過テリ」という考え方

がどういう経過によって河有野史に伝わったのか説明し難い)。

薩摩人の県令三島通庸の圧政に反抗した福島自由民権運動の指導者・磐州が捕縛されたのは明治15年12月1日である。若松監獄から国事犯として鍛治橋監獄に送られ、16年2月12日から始まった裁判で軽禁獄七年の判決(磐州の弁護人は星亨、田母埜秀顕の弁護人は大井憲太郎、澤田清之助の弁護人は植木綱次郎)。宮城集治監に送られて、22年2月11日の帝国憲法発布に伴なう恩赦で出獄している。福島事件で行動を共にした磐州の甥河野広躰は、捕縛を免れて残党と共にそのまま加波山事件に参加する。加波山事件では富松正安らと共に過激な武闘を繰り返して捕縛され、19年7月3日の判決では広躰は無期徴役となり、空知集治監に入れられる。富松正安の判決は死刑であった。

迂路を辿ったのは、富松正安を介して透谷が河野広躰や磐州に関心を持ち、特に磐州をモデルとする『獄裏夢』の「吾過テリ」という物語設定に関心を持ったはずだとの推測を述べたいからである。

富松正安を介して透谷が磐州に関心を持っただろうと推測する根拠は次のようなものである。例えば、既に述べたように『大矢正夫自徐傳』によると、大矢は明治17年1月に神田静修館にはいる、その同宿者に透谷と正安がいたことを書いている。大矢は在館者の名前を列記した後「正夫が富松正安氏と相知り、相語合ひ、相盟ひしは、即ち此時にして水島保太郎氏の紹介に依りてなり。正夫が脚氣に罹らざりせば恐らく加波山事件の一人たりしならん」と書いている。大矢の脚氣転地療養は透谷が導いたことからもわかるように、透谷と大矢とは極めて親しかった。富松との交わりも親密だったと考えてよいだろう。大矢は加波山事件に注目していた。透谷もそうだろう。福島事件の残党であることによって、河野広躰は政治小説の英雄でもあった。透谷は、このようにして広躰に関心を持ち、また透谷が属した民権左派の指導者大井が弁護人を務める福島事件の指導者磐州に関心を持ち、『獄裏夢』の「吾過テリ」という烏有子にぶつかったと思われる。

勿論、ここに示した具体的な人間の関係を確認するまでもなく、民権運動から離脱したことで深刻な負い目意識を抱えて「一種の牢獄」の中にいた透谷が『獄裏夢』というタイトルに惹かれて読んだと推測することも十分可能である。

政治小説を志したときの透谷が構想すべき主題については先に述べた。『獄裏夢』の内部の問題を少しく検討してみよう。

宮城集治監における明治19年12月31日に時間設定されるこの物語は、「君不見南山之虎小似猫向人厨下求食嘷英雄失路儘如此傍人何意漫相嘲」云々という吟詠に続く「微吟低徊良々久シ既ニノ長大息ノ曰ク嗟吾過テリ吾過テリ」という形で始まる。烏有子の述懐は情緒的過ぎるところがあるが、彼が「吾過テリ」と嘆息する端的理由は「蓋シ時命ノ遭逢誠ニ己ムヿヲ得ザル者アリテ然リト雖モ抑亦タ我カ浅心短慮之ヲ致セリ、特リ我カ母ニ背キ我カ子ヲ棄ルノミナラズ我カ同志ノ士ヲノ兄弟相憫ミ骨肉相恨マシムル者實ニ我カ罪ナリ千懺萬悔身ヲ何ノ地ニ措カン」というものである。これに対して暮雪生が「顧フニ吾カ一身ヲ以テ自由ノ犠牲ニ供スル者又タ安ンゾ區々恩情ノ羈絆スル所ト爲

ル可ケンヤ（中略）子ハ我カ黨ノ先輩ナリ而シテ軟弱此ノ如シ獨リ某生ニ愧チ[ママ]ザランヤ」と非難する。西壁生は「暴ヲ以テ暴ニ代フル者今古未ダ嘗テ如此ノ禍ニ罹ラザル者アラザルナリ」と慰める。玉砕子は尊王ノ名ヲ昌シテ尊王ノ心ナク愛國ノ言アリテ愛國ノ實ナシ陽ニ與フル者ハ必ズ陰ニ奪ヒ之カ名ヲ存スル者必ラス之カ實ヲ去ル詭譎變幼[ママ]ソノ情ヤ私曲ソノ術ヤ姦猾ナリ」というように世の現実を暴く。烏有子は「退イテ往日ノ爲ス所ヲ察スルニ言論辞氣喜ンテ忌諱ニ觸レ故サラニ罵言ヲ爲セシ者是レ罪ナシトセンカ（中略）決死以テ誓ヒ密約秘謀禍心ヲ包蔵スルガ若クナル者是レ罪ナシトセンカ（中略）加波山ノ事輕擧暴動名ナク義ナシ其人吏ヲ殺傷シ良民ヲ却奪スル者洵ニ刑法ノ容レザル所亦治安ノ罪人ナリ（中略）大坂ノ獄ソノ徒極メテ蕃シ（中略）而シテ之ガ徒タリ之ガ魁首タル者大抵嘗テ我カ黨タリシ者ナリ（中略）自由ヲ求メテ自由ヲ害シ（中略）甚シキハ人ノ身ヲ却カシ人ノ財ヲ奪ヒ殘賊戕害爲ザル所ナシ（中略）而シテソノ名ヲ問ヘバ曰ク我ハ自由ノ爲メニスル者ナリ我ハ權利ノ爲メニスル者ナリト」というように民権運動の実態を暴いて大阪事件にみられた堕落ぶりを批判する。[9] 物語全体は、烏有子の言葉が長々と続き、国利民福を志向する彼が、詐術の横行する国際政治、新政府の顕官たちの私情、民権運動内部の欺瞞などを暴いて批判する形になっている。しかし末尾では今は人々の自由と権利が増大した「聖代」だと称える形になっている。末尾部分のこのような物言いは、隣りの監房にいて姿を見せない東壁生の帝政党の立場からの主張と近接するのであり、民権家烏有子を描く必然性を危うくしているといわざるをえない。入牢に至った己れの「淺心短慮」を過ちとする描き方や、例えば、加波山事件や大阪事件の民権運動を激しく批判するのも出版禁止を免れようとする本音隠しの技法だと見做して差引いて読む必要はあろうが、そのような配慮をしてみても、結局烏有子の国家権力への迎合ぶりは否定しようがない。ただ、そうでありながら民権運動の堕落ぶりを具体的に指摘する部分が的を射ていることも否定できない。負い目意識を抱える透谷にとってこれらの言辞は恐らく首肯できるものであり、訴えるところが多かったろうと思われる。例えば、引用した暮雪生の言葉は透谷の嘗ての言説（「哀願書」や「石坂ミナ宛書簡草稿」「父快蔵宛書簡草稿」で言う彼の「アンビション」）に重なるだろうし、他の引用部分で傍点を付したところなどは美那との恋愛が問題となったときにみられる壮士批判や世の現実を暴く彼の言説に重なるところが多い。時間の前後関係をみれば、むしろ透谷の書簡類には『獄裏夢』の言辞やその調子をうけて透谷自身のそれとして出ているように思われる。例えば、西壁生の「暴ヲ以テ暴ニ代フル」などは明治21年1月21日の「石坂ミナ宛書簡」に出てくる。玉砕子の言葉は明治20年12月14日の「石坂ミナ宛書簡草稿」の「今の世の人情ハ陽ニ蜜をあハ[ママ]わせど（裡）陰にハ恐るべき劔を蓄ふるものとや云はん」「權力ハ次第に一方に集まり（中略）社界黨は日一日に増加し、無産の輩ハ遂に有産の輩に勝ち、曲ハ正を打ち邪ハ直を亡ぼす」という言説に近似するといえる。烏有子の言葉は、明治21年1月21日の「石坂ミナ宛書簡」でいう「利ハ人情の

至性なり、慾ハ社界の流動体なり（中略）世の壯士は口に利を難し慾を咎むるも、其利の爲めに自ら責めらるゝを悟らざるなり」と重なって「有志者の酒上の議論、春樓の豪放を聞くに忍びず見るに耐へず、悵然として自ら恥ぢ、慨然として自ら悔ひ」と透谷に運動離脱の理由を整理して回想させる働らきをしたのではないか。

ただ、『獄裏夢』の問題点は、烏有子が加波山事件や大阪事件の暴挙を批判し、藩閥政府についてはいうまでもなく民権運動組織の藩閥的運営を批判するのはよいとしても、さらに「列國ノ交際始ヨリ信義ノ心有ルニ非ズ（中略）砲火ノ以テ敵ヲ震砕ス可キ有レバ以テ曲ヲ轉メ直ト爲ス可ク以テ非理ヲ理トシ不義ヲ義トス可シ」といって、透谷の「權力ハ次第に一方に集まり（中略）社界黨ハ日一日に増加し、無産の輩ハ遂に有産の輩に勝ち、曲ハ正を打ち邪ハ直を亡ぼす」という認識と殆んど同じような言辞を使っているにも拘らず、烏有子の「曲」「理」「義」は国際関係における弱肉強食の実態、特に日本を脅かす列強の不当ぶりを指摘するために使われているのであり、さらに透谷のいう国内における「曲ハ正を打ち邪ハ直を亡ぼす」状況を烏有子は「聖代」という言葉で跨いでしまっていることである。烏有子は終始「吾過テリ」の姿勢を崩さない。「淺心短慮」のゆえに「我カ母ニ背キ我カ子ヲ棄ルノミナラズ我カ同志ノ士ヲメ兄弟相憫ミ骨肉相恨マシムル者實ニ我カ罪ナリ」と語るが、その「淺心短慮」「同志ノ士ヲメ兄弟相憫ミ骨肉相恨マシムル」事態を剔抉しないままに語る。無論そのことがこの小説の主題から逸れるにしても、「吾過テリ」と言う以上はその内実に触れざるをえないにも拘らずである。囚人たちは、それぞれに長々と語って明治政府の要人や民権運動の在り方を批判してはいるのだが、彼らが指摘する諸問題は自らも加担してそのような事態を作ってきたこと換言すれば過去の己れの問題に絡めては捉えられていない。彼らはいわば自分の外側にのみ視線を向けていて、自己の内側を剔抉する視線をまったく欠落させているといえる。例えば、烏有子は「余カ大イニ懼レテ大イニ悔ユル所ノ者ハ則チ一アリ」「ソノ内ヲ見テ未ダソノ外ヲ見ザル之ナリソノ己レ有ルヲ知リテ未ダソノ國有ルヲ知ラザルナリ」と語るが、それは「國ノ獨立富强獨リ大イニ意ヲ致サザル可ケンヤ」というように単に国際的な政治状況での国権拡張を主張するためである。彼は、過去の時代に較べて今日が国民の権利を認める「聖代」だと言い、「囹圄ノ地牛角馬頭人類ノ宜シク群ス可キ所ニ非ズ（中略）食飽クニ足リ衣暖ナルニ足リ起居安ンズルニ足リ責罰至ラズ鞭撻加ヘラレズ暇アレバ則チ圖書自カラ娯シミ優遊自カラ終フ此レ亦タ獄中ノ自由ヲ得ル者抑此レ誰ノ賜ゾ聖朝弘大恩德ノ及フ所ト雖モ亦タ我ガ當路諸公ノ力ニ非ズヤ」と言う。末尾部分では暮雪生が「國會ノ會期亦タ復タ一年ヲ減セリ我カ輩亦タ將サニ日々月々ニ自由ノ陽春ヲ迎ヘントス今夜ノ歳除亦タ以テ我カ輩ノ節分ト爲ス可キナリ僕請フニ兄ノ爲メニ之ヲ祝セン」と炒豆を分かち、玉砕子もまた「我カ輩國利民福ニ志アル者今罪ヲ此ニ抱クト雖モ他時罪解ケ刑免ルヽノ後陽春白日ノ下豈ニ一箇ノ福六壽星タル丁能ハザランヤ」と応じて、共に「鬼ハ内福ハ外」と声をあげる。このような物語の展開

は、それを出版条例の法網を潜るための配慮とみて割り引いて考えるにしても、獄中の囚人の心理或いは苦悩に触れることを不可能にするであろう。

『獄裏夢』は、烏有子の「吾過テリ」という嗟嘆で始まり、中江兆民の『三醉人經綸問答』（明20・5）に先立って、囚人同士の対話で物語を展開するという誠に魅力的な着想によって書かれたのだが、最後は「他日罪解ケ刑赦サル、ノ後豈ニ以テ償ナフ所無カル可ケンヤ」と国利民福と国権拡張のために尽力しようとの希望を語って「自由萬歳」で終る。烏有子は「吾過テリ」の立場を一貫させ、他の囚人も彼に同調する。しかし、それは彼らの間で真の対話が成立した結果だとはみえない。それぞれが自己の内部を剔抉することがないために、彼らの「自由萬歳」の叫びは何とも軽く浮いてしまうのである。

わたくしは、透谷が『獄裏夢』を読んだだろうと推定して拙論を展開しているのだが、透谷はまずこの小説のタイトルに惹かれたであろう。そして烏有子の「吾過テリ」という述懐のみならず、民権運動内部の矛盾を暴いて批判する言説を受け止めたと思われる。『獄裏夢』で語られた社会認識や壮士批判の言説が酷似する形でこの直後の透谷の書簡類にみられることがこの推測を裏付けるのである。だが、『獄裏夢』の言説は烏有子を初め囚人たち自身の内部剔抉を経ないままに出されていること、現実的諸矛盾を「聖代」という言葉で跨いで「他日罪解ケ刑赦サル、ノ後」には単純に国権論者たらんとの夢を語らせて物語を閉じることの二点で透谷には違和があったのではないか。

※

既に述べたように、民権運動を離脱した透谷は明治18年9月に東京専門学校に再入学し専修英語科に籍を置いた。「政治上の運動を纖々たる筆の力を以て支配せん」と望んでのことである。その時から石坂美那との恋愛が問題になるまでの約二年間、彼は一篇の習作らしき政治小説も残していない。それは、民権運動を離脱した負い目の意識を抱えながら「佛のヒューブ其人の如き」政治小説を書こうとすることの矛盾つまり負い目意識を発語の基盤とせざるをえない透谷が当時の政治小説の通念である政治的な貴種・才子佳人の物語を構想することの矛盾を越えて言葉を紡ぐことができなかったということであろう。

ところが、美那との出会いは透谷の転機になったと考えられる。民権運動から離脱したことの負い目意識に加えて、婚約者平野友輔のいる美那が「一儒生」「一貧生」である透谷と親交することに反対する美那の両親の苦言、さらに休職中の父快蔵に替って家計を支えなければならない透谷の商業上の賭けの失敗などが重なって、自らを「大敗の餘成す所なき一糟粕」「敗餘の一疾病者」と自己否定せざるをえない。にも拘らず、美那恋慕の感情を抑封し切れずに苦しむ。そのような「一生中最も惨膽たる一週間」は、彼に徹底した自己剔抉を強いることになる。そして抑封しようとして抑封し切れない美那恋慕の感情を無理にでも抑封しようとして美那を極端に美化する言葉「眞神

の庭に成長する葡萄の美果」を用いるとき、彼は「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟」する。そして「神に捧ぐる献上物」「眞の神の臣下」としての自己を発見するのである。[10]

透谷は、明治20年8月下旬の「父快蔵宛書簡草稿」の中で、美那について「生を救ひたる援兵」「嬢は實に第二の大矢なり」と言う。これは、「英雄豪傑を欽慕」する功業心が「妄想」であったことを教え、「彼は一儒生なり、一貧人なり（中略）彼は美ならぬ家に住めり」と非難する両親に対して「愛人は高き地位を望む人ならず、彼は尚ほ最も好む可き慕ふ可き（〈地位〉）職に居れり。神に使（ママ）へ、世に道を傳へ、彼の富貴に驕れる者が（〈衣食に乏しきさへも〉）出來（〈可き〉）得へき丈獵り集めんと（〈する〉）望むに比すれば杳に優れる地位に安んずるなり」[11]と弁護するのみならず「神に感謝し神に歸依す可き」ことを教えて自分を救ってくれたことを端的に述べたものである。

透谷における言語の獲得の問題としてこの部分を見れば、重要なことが見えてくるように思われる。

後に書かれる周知の評論「厭世詩家と女性」（明25・2）で、透谷は「戀愛は人世の秘鑰なり、戀愛ありて後人世あり、戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ」と書いた。この部分はよく知られている。だが、彼は続いて次のように書いた。即ち、「戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く何となく物寂しき位地に立つ者なり、而して各人各個に人生の奥義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく、戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく假を去つて實に就き（中略）想世界と實世界との爭戰より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは即ち戀愛なり。此戀愛あればこそ理性ある人間は悉く惱死せざるなれ、此戀愛あればこそ實世界に乗入る慾望を惹起するなれ。コレリッヂがロメオ、エンド、ジュリエットを評する中にロメオの戀愛を以て彼自身の意匠を戀愛せし者となし第一の愛婦なる『ロザリン』は自身の意匠の假物なりと論ぜるは蓋し多くの愛情を獣慾視して實性を見究めざる作家を誡しむるに足る可し（中略）戀愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる『己れ』を寫し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社界の眞相を知る」と。この「想世界の敗將をして立籠らしむる牙城」と言っている部分には彼の美那との恋愛体験が実感的に反映しているだろうが、これを透谷の書簡類と重ねてみよう。

「厭世詩家と女性」で、ロザリンがロメオの恋愛の「自身の意匠の假物」だと言うコールリッジの論を紹介する透谷は、恋愛が正当に成立し「人生の奥義の一端に入る」には他者性の認識が不可欠なのだということを言いたいのである。他者性の認識つまり自己の立場や発想の枠組で捉え切れない厳然たる他者、それを認知するとき自己が同時に他者にとって他者であることの認識になるのであり、それは自己の立場や発想の枠組を変化させ相対化させないわけにいかないということ、そのようにして自己と他者が互いに自己と他者として捉え直される――そのことを言っているのが「戀愛は一たび我を犠牲にすると同

時に『己れ』を寫す明鏡なり」の意味である。「戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく、戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず、戀愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく假を去つて實に就き」とはその言い換えである。[12]

次に、恋愛が「想世界と實世界との爭戰より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城」だとし、「此戀愛あればこそ理性ある人間は悉く惱死せざるなれ、此戀愛あればこそ實世界に乗入る慾望を惹起するなれ」という部分が問題になる。これも明らかに美那との恋愛体験を踏えた言い方であろう。美那との恋愛が意識されたとき、透谷は民権運動から離脱した負い目の意識を抱えていた（当然、美那も事情の概略は知っていた）。それに加えて先に述べたような事情があって、彼は自ら「大敗の餘成す所なき一糟粕」と言わざるをえなかったのだが、突然「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟」したと言う。創造者にして絶対的超越者であるキリスト教の神との出会いは、透谷の自己否定を貫徹すると同時に自己を神の被造物として肯定する根拠の発見を意味する。物心両面において絶望的状況にある透谷が、ここで「我は敗軍の將なりと神は嘲り給ふまじ神は却て我をあはれまん」或いは「イザ我れ眞の神の臣下となり神に忠義を盡す可し」と急転回できるのは自己否定を貫徹し同時に自己肯定を可能にする神との出会いにおいてである。

このことを透谷の言語獲得の問題として考えると次のようなことがわかる。即ち、超越的絶対者であるゆえに神は人が自己を高位に置き自己の立場や発想の枠組で捉えることを原理的に許さない。このような神に対峙する存在としての自己を神の被造物として捉えるならば、必然的に神の創造活動つまり神の救済史に参与する者としての自己を認識するはずである。[13] 一見すると矛盾と悪に満ちたこの世の現実――しかし、神がそれを創造し、なお神はその救済に向けて働いている。この世の現実にあってその神に応答する主体であろうとすれば、当然のことながら垂直的志向によって再造された水平的次元の志向を生むのであり、そこで紡がれる言葉はラディカルなものにならざるをえないだろう。自ら「激烈な人種」と認める彼の性格に相剰して、例えば「英雄豪傑を欽慕し」「發狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは此心に離れて安穏なる生活を過ごす事を得ざるべし」といっていた激しい「名譽と功業とを成さんと思ふ心」がここで逆に「妄想」として激しく否定される形で現われてくるのはこの事情を示している。

序でに言っておこう。幼少年期に「英雄豪傑を欽慕」したこと、青年期に「愛國ノ志ヲ抱イテ（中略）三千五百萬ノ同胞及ビ連聯皇統ノ安危ヲ以テ一身ノ任」としたことなどは素朴な水平的次元の志向つまり世俗的な意味での選良願望から生れた「アンビション」である。「三千五百萬ノ同胞及ビ連聯皇統ノ安危」を図ると言いながら「弱肉強食ノ狀ヲ憂ヒテ此弊根ヲ掃除スル」ことに努めるにしても、それは依然自己或いは日本国の立場を高位に置くことであり、従って自己の発想の枠組みにおいて他者を捉えることである。それはナショナリズムを生む構造でもある。透谷は当時の殆んどの民権論者が同時に国権

拡張論者でもありえたというその思考法の矛盾を衝くのである。

嘗ての自己の「アンビション」を激しく否定する形は、彼の壮士批判にも現れる。例えば、「世に所謂志士の如き者、一時の狂勢を借りて千載の大事を論構するの弊極つて、社界ハ浮薄を以て表面となし、輕躁を以て裡面となし、暴を以て暴を制し虐を率ひて虐を攻めんとす」という認識、「世の壯士ハ口に利を難し慾を咎むるも、其利の爲めに世を救ハんとするを知らず、慾の爲めに自ら責めらるゝを悟らざるなり」「彼等の暴を制せんとするハ好し、然れども暴を以て暴を制せんとするハ、之れ果して何事ぞ、暴を撃つが爲めには兵器も提げて起る可し、然れども其兵器は暴の劔なる可からず、須らく眞理の鎗なる可きなり（中略）独り吾等の腕を以て戰ふハ非なり將さに神の力を借りて戰ハざる可らず」[14]という透徹した見方、また「今の世の人情ハ陽に蜜をあハわせど（裡）陰にハ恐るべき劔を蓄ふるものとや言ハん」「權力ハ次第に一方に集まり、生産の成果ハ只一部の種属に籠略せられ（中略）無産の輩ハ遂に有産の輩に勝ち、曲ハ正を打ち邪ハ直を亡ぼすの時も遠からずして來るべし」[15]など、垂直的志向によって獲得された彼の状況認識をみると、その言説は生硬ながら無類の鋭さを持っている。

ここでは先に検討した『獄裏夢』の言説に関わるものを意識して取り出してみたのだが、透谷の言説の鋭さは、彼が政治小説を模索する中で読んだ『獄裏夢』の言辞に刺激を受けた後に石坂美那との恋愛によって強いられた徹底的な自己剔抉とキリスト教の神との出会いによって可能になった垂直的志向によって生まれていると言ってよい。彼は、美那について「此六月以來、生は自ら驚く程の耐忍力を以て此大敗軍に伴ひたる失望落膽を拒ぎたり、然れども此間に又た生を救ひたる援兵なきにしもあらざりし（中略）我が親愛なる石坂孃にてありし」[16]と書いているが、これは美那との出会いと彼女によって教えられたキリスト教の神との出会いとが透谷の言語獲得の問題として如何に大きな意味を持ったかを語っていると考えられるのである。

注

（1）『透谷全集　第三巻』（昭30・9　岩波書店）の勝本精一郎氏による解題参照

（2）『大矢正夫自徐傳』（昭2・5）参照。この間の交流ぶりについては「透谷文学の原型――『富士山遊びの記憶』をめぐって――」（「文芸と批評」昭51・7）で論じたことがある。

（3）「石坂ミナ宛書簡」一八八八・一・二一

（4）『妾の半生涯』（明37・10　東京堂）、ここでは岩波文庫を引用した。

（5）「『春』と透谷――北村未亡人談――」（「早稲田文学」明41・7）

（6）注3に同じ

（7）『北村透谷研究　評伝』（平7・1　有精堂）

（8）『獄裏夢』第二版の巻末に付された各新聞評を見るとこの小説の読まれ方がどのようなものであったかがわかる。例えば、「めざ

まし新聞」の評には「本書の著者河有野史は巻末の著述業兼出版人なる岡安平九郎氏其人なるが」とあり、「朝野新聞」の評には「目下宮城の監獄中に幽囚せらるゝ河野花香平島等諸氏の心事を述べたるものと知られたり」とある。

(9) 透谷の「時勢に感あり」(「女学雑誌」明23・3)には「傲然として言ふ者あり吾れ國を愛すと、其妻は明朝の食を憂ひ、其娘は誓ふ事久ふして未だ嫁す能はず、一壷既に盡きて他を呼ぶ、妻逡巡して起たざれば彼れ足を擧げて蹴る、彼れが政談を爲す時は一個の愛國者なり、彼れが家庭に歸る時は既に一家の破壞者、一國の破壞者たるを甘んず」という愛国者批判があって、『獄裏夢』の愛国者批判と通底するところがある。

(10) 石坂美那との恋愛をめぐる特に自己否定と自己肯定の問題については「透谷文学形成期の問題(三)――書簡類の検討――」(「聖学院大学論叢」三・四 平2・12と平3・12)で細かく論じた。

(11) 「絶情」。これは美那に仮托して透谷が書いた短文である。

(12) M・ブーバー『我と汝』(植田重雄訳 岩波文庫)参照。ブーバーは信仰論として人と神の関係の在り方を論じているのだが、透谷は恋愛論としてブーバーと同じような思考をしている。例えば明治20年の9月3日の「石坂ミナ宛書簡」をみると一層明らかである。即ち「My Dearest/小生ハ貴孃と、最も親密なる交際を結ばん事かねてより、のそみ居りける所にてありし、然しながらMutual loveに陥らんとハ夢にだも想ハざりし、其を如何にと尋ぬるに、生ハ此世の人とハ信實につき合ひ難し笑ひ興じて世を渡らん、世の人々ハ生の心を知らざる可し、世の人々ハ生を親しまぬならんと思ひ居りければ、交際ハ唯外面にのみ止まりて眞底打明けて話す事ハなかりしも一度び貴孃の風采を慕ひしより、願ハくハ此レディを以て欝をなぐさむる眞の友となさまほし(中略)今ま吾が慕ふ所の一貴女(ママ)(You)、若し吾が妻よ、我ハ夫よと(中略)左は左りながら彼の一貴女ハ(ママ)(You)終身独立にて暮す人なるべきか」云々と書いている。ブーバーのいうDoを透谷は「吾が慕ふ所の一貴女」として特にYouと表記する。

(13) P・ティリッヒ『生きる勇気』(大木英夫訳 平凡社ライブラリー)参照

(14) 注3に同じ

(15) 「石坂ミナ宛書簡草稿」一八八七・十二・十四

(16) 「父快蔵宛書簡草稿」一八八七・八月下旬

付記

※透谷文の引用は、『北村透谷集 明治文学全集29』(昭51・10 筑摩書房)によった。但し、傍点はすべて引用者・黒木による。なお、編者は書簡類において「ミナ」としているが、ここでは「美那」と表記した。

※『三春落花獄裏夢』は、早稲田大学総合図書館蔵のマイクロフィルムを用いた。但し、これも傍点はすべて引用者・黒木による。

Some Assumptions regarding *The Poem of Prisoner*

—— The Development of Tōkoku's Poetic Diction ——

Akira KUROKI

This paper deals with some previously considered problems of *The Poem of Prisoner* (1889. 4), by analyzing the letters of Tōkoku and the novel *Dreams in the Prison* (1887. 4).

Three problems are clarified:

1) The emotional distress following Tōkoku's withdrawal from the Jiyūminken Undō (the political movement to achieve freedom and civil rights).
2) The emotional distress related to his love affair with Mina Ishizaka.
3) The influence of *Dreams in the Prison* in his study of political novels.

This paper elucidates the formation of Tōkoku's poetic diction.

Key words; The Poem of Prisoner, Letters of Tōkoku, Dreams in the Prison, Jiyūminken Undō, Love Affair with Mina Ishizaka, Formation of Tōkoku's Poetic Diction